

「ごめんね。ウソついた」

「天使がウソなんてついていたの？」

「イメージ的にはよろしくないんだだろうけど、今は見逃してほしいな」

「見逃さなかったらどうなるの？」

「どうにもならない。多分ルークがちょっと文句を言うくらい」

「そんなに罪にはならないんだ」

「そういうこと。案外ウソって天界でもどうでもいい扱いをされている」

シメオンは伊吹をベッドの上に置くとそっと唇を重ねてきた。

「キスがしたいの？」

「いや、セックスがしたい」

「天使もセックスってするの？」

「するよ？知らなかったの？」

シメオンは再び伊吹の唇に軽くキスをする何回か小鳥がついばむようなキスを繰り返して、伊吹の上唇を軽く自分の唇で挟んだ。

「いい？ずっと伊吹のこと気になっていたんだよ」

伊吹は少し考えると体を起こしシメオンの唇に自分からキスをすることでOKの返事をした。

「ありがとう」

「ねえシメオン。天使にとつてのセックスってどんな意味があるの？」

「もっと仲良くなるための方法」

「なにそれ？かなり面白いんだけど？」

伊吹のシャツを脱がせながらくすりとシメオンは笑うと、あらわになった下着のホックを外し伊吹の胸をそっと撫でた。

「だって本当にそうなんだもん。人間にとつてはセックスってどんなものなの？」

「彼氏と仲良くするための方法」

「変わらないじゃないか」

「そう？一応特定の相手っていう条件は付いているんだけど？」

「天使が見境ないようなことを言わないでよ。天使だって特定の相手としかセックスはしないよ」

シメオンの手は伊吹の乳首を優しく撫で軽く挟むとくすぐるように指先で愛撫をした。

伊吹は特にリアクションがないことを確認すると、今度はもう片方の乳首を口に含み舌先で転がす。

「ん・・・」

小さくあえぐ伊吹の声を聞くと何度か吸ったり転がしたりを繰り返して伊吹の気分を盛り上げた。  
シメオンの手は腰回りを經由し伊吹のスカートの中に入るとシヨーツ越しにクリトリスをくすぐり始めた。